

浄土

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別扱承認雑誌第三五二号）
昭和三十六年三月二十五日 印刷（昭和三十六年四月一日発行）

第二十七卷

第四号

四月号



☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

新刊 浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇円
送料八円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料八円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都品川区上大崎一ノ七八二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

浄土四月号 目次

表紙・扉絵

結城天童

さし絵・カット

加藤金一

七百五十年遠忌を迎えて……………安居香山(2)

御忌雑感……………佐藤行信(5)

上人の遺徳を偲ぶ……………藤井正雄(6)

念仏をなつかしむ……………那須政隆(12)

念仏のひびき……………須藤隆仙(14)

インスタト時代の宗教放送……………摩尼清之(8)

アメリカに於ける仏教受容の一面……………梶村昇(10)

近代高僧 都芳随円……………大橋俊雄(18)

法然上人の感化……………村上博了(20)

新編 百喩経……………伊東拳位(32)

童話 明日は花まつり……………高橋良和(22)

扉の御法語……………観音さまの賭ごと……………(4)

童心仏心……………弘法大御の雨乞……………(29)

新刊紹介……………独自の使命……………(7)

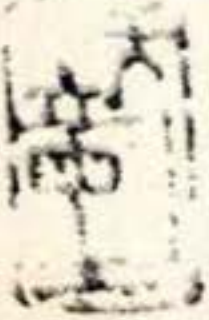
中国綺談 西池園記(上)……………牧尾良海(24)

浄
土

四
月
号

釈尊の在世にあはざる事は、かな
しみなりといへども、教法流布の世
にあふ事をえたるは、是よろこび也。
たとへば目しゐたる亀のうき木のあ
なにあへるがごとし。

法然上人御語法



七百五十年遠忌を迎えて



安 居 香 山

○

偉大なる法然上人の七百五十年の遠忌を迎え得たことは、正に「聖代」に遇った感激と言う外無い。少くも次の五十年目には、私はこの世の人ではない筈であるからである。それだけに多くの感懐があるわけであるが、同じ吉水の流れを汲むと言う蟲屑目むしめでみると、この遠忌に対する一般の人々の無関心さに就いて、なぜかざるを得ない。一体これは何故であらうか。

五十年の差はあるとしても、法然を師とし、同じく鎌倉仏教の中で、庶民救済の宗教を鼓吹した親鸞上人の大遠忌が同年に行われる事は、法然上人にとって、何としても損なこと

である。亀井勝一郎氏が「入寂の年と誕生の年」と題した随筆の中で

今年は日本の宗教界にとって、記念すべき二つの行事がおこなわれる。親鸞が入寂してから七百年目の遠忌と、内村鑑三誕生百年祭である。

として、「罪の自覚」の問題を論じながら、終に法然上人の遠忌の事にも触れない事は何を示しているのであらうか。それは、二人の偉大さの質的差ではなく、その社会的理解の量的差ではあるまいか。その生涯の数奇さでは、遙かに親鸞に、大衆的エピソードがあるとしても、亀井氏が論ずる罪の自覚の問題の一つをとってみても分る如く、「煩惱具足の凡夫」を人々に知らしめた宗教的活動に於いては、法然は寧ろ

先師であつた。而も尚、より深い関心が親鸞上人に寄せられることに、われわれ吉水の流れを汲む一人として、その責任を感じずにはいられない。国鉄の遠忌団参ダイヤの中に、東西本願寺があつて、知恩院の無かつた事にその盛り上りの少なさと戸惑いを味わい、遅巻きながら、東京の大丸での知恩院展に胸を撫したのは、私個人のみの杞憂であらうか。譬え京都名物展との抱き合わせの展覧会であり、又単に過去の文化財の美術展覧会であつたとしても、あれ程多くの人々に、法然上人を知らしめ、知恩院を認識せしめた事は、よい企画であつたと言えよう。それにしても、何故に此の機会に、もっと法然上人を知らしめ、近ずかしめる工夫と努力をしなかつたのであらうか。知恩院は、随分な文化財を持っていると言ふ印象のみが、一般の人々の受けたものではあるまいか。それにつけて思う事は、法然上人を本当に知らしめる伝記の少ない事である。確かに、その伝記の多い点からすれば、日本仏教の祖師の中では有数な方かも知れない。あの豪華な勅修御伝に始まり、最近の佐藤春夫氏の「極楽から来た」に至るまで、誠に数多い事である。然しながら、今日の人々に、宗教的な感動と共に、法然上人の人格と、その教えに接し得る伝記とを考える時、果してどれをあげたらよいであらうか。学術研究書としての伝記や、美術的作品や、頭の中で勅修御伝を書き替えた創作は、それはそれとしての価値はあ

るとしても、一向に本当の法然上人の人格と、その中から溢れ出て来た宗教を、今日の人々に知らしめることは出来ない。

○

かつて私は、ルナンのイエス伝に感激した。そしてある友と、こんな法然伝が欲しいものだと言つた事があつた。学生時代のことである。それは、ルナンが

私はこの書で、イエスの啓示したやうな魂の宗教——我々の内奥に眠つてをり福音の大いなる魅惑者が、すばらしく目醒ましめ得るところの真の宗教を、再び生かさうと思つた。と言つて居る如き意気込みを以て、「イエスの歴史に大切な地方は一つも洩さず」遍歴し、その感動と、彼自身の信仰を注ぎながら、歴史的事実を裏付けつつ書き綴つたものである。ルナンを通して、イエスが再現された所に、人を感銘せしめるものがあるのであらう。

法然上人八十余年の生涯も、誠に波乱に豊んだものであつた。そして、その間遍歴された地域と、その時々、人々に教化せられた信仰談義は誠に数多いものがある。今こうした足跡を実際に尋ねつつ、その教えを辿り、それを通じて上人の一代記を、ルナンの如き心意気を以て書き綴るならば、必ずや、悩み多い今日の人々を感動せしめ、その教えに直参せし

め得ることであろう。

如何に時代が進み、科学が進歩するとしても、生の悩みと死と言う現実を生涯の課題として荷せられている人間にとって、その悩みは同じである。そこには、時間と空間の差は無い筈である。

そうした悩みを自覚せしめ、解決せしめ得ぬことは、法然上人の教えに背くものであらう。そして、そのチャンスを与える一つに、法然上人のよき伝記が考えられよう。七百五十年大遠忌を迎えるに当り、その種記の伝生れ出ずる事を望むや切である。

観音さまと

賭けごと

昔し、一人の賭けごとの大好きな貧乏侍がいた。あるとき、同僚の侍と雙六を打ち、負けに負けて、しまいには賭けるものがなくなってしまった。勝った侍はどうしても賭け物をよこせと催促する。

負けた侍は因り果てて、「自分には、なんの財産もなく、貯えたものといえは清水観音への二千度詣でだけだ。その権利を譲るから、それでかんべんしてくれ。」と、とうとう二千度詣での権利までを賭け物にしてしまい、それも失つてしま

う。その後、負けた侍は、思いがけぬことによって獄につながれ、勝った侍は富裕な妻を得て、富貴な身となって幸福に暮した。

これは、平安時代の末に作られた今昔物語に出てくる話です。今昔物語や宇治拾遺物語には、このような賭博の話が若干出ていて、正当な努力や勤労によらず、まぐれざいわいを求める人間の本能的欲望は、いつの世にも変りのないことが知られます。賭けごとはかなり古い時代から行なわれていたようで、日本書紀の中にも、賭けごとの事実が記されています。賭博の方法も、文明の発達にともなって、複雑になり、組織化されてきましたが、今昔物語にえが

れている時代には、簡単な雙六による賭けが一番多く、宿直の侍部屋などでは、雙六賭けがよく行なわれていたようです。せつかくの二千度詣での権利を賭ける男も男なら、受けとる方も受けとる方、また賭け物の効能を認めて受けとった方に御利益を授ける観音様も観音様で、ここには、この時代の庶民風俗の一端が窺われます。しかし、この話の本当の意味は、雙六のような取るにたりない遊戯にも、真心をこめて授受した賭け物には観音様も効能を授けるものだ。いかにいわんやまじめな大事においておや、という観音様の慈悲心を教えているのです。

宗祖法然上人 750 年



御 忌

御忌

雑感



佐藤 行 信

私は幸運にも七百五十年御遠忌に宗祖の祖廟のある本山に参拝する機会を得、非常な感激をおぼえた。私は入洛の度には何時も本山に参拝し、その荘嚴な宗教的雰囲気にあふれた華頂山の山内を歩く事を喜びとしていたが、今度は、五十年に一度の御遠忌で京の町を走る電車には「法然上人御遠忌」のプラカードが下がっていたり、デパートでは「法然上人展」を開催していたり、京都そのものが遠忌ブームに湧きわたっていた。円山公園より一步知恩院境内に入って先ず最初に驚かされたのは、夥しいバスの数。それが遠く浜松あたりからも来ている。聞くところに依ると、遙る遙る米国より飛行機で参拝にやって来る信者の方もあるとか、このめざましい交通機

関の発達は、五十年前の御遠忌とは全く比べものになるまい。私個人にしてみたところ、朝食を鎌倉の我家ですませ昼食を京都でとるという次方である。

境内に足を踏み入れて私が第一に感激したのは、三ヶ所に張られた天幕の中で各々に行われている伝道の光景、そしてそれを非常に熱心に聴き入っている大勢の人達。私は、我が宗門の伝道も時と処を得ればこの通りに、まだまだ現代人にアピールする処大であると確信出来た。

次いで私は祖廟に参拝に行ったのであるが。こちらは境内の混雑にひきかえ、私を含めて二、三人の人しかお参りに来ていない有様で、私はこれにはいささか淋しい感じがしたのであった。これはきっとバス等で参拝に来る団参が法要時間いっぱいに来る為、時間の関係でお参り出来ないのであろうと思われる。

その後私は大殿前へ出てみた。大変混雑しているその大殿前で、これも亦如何にも昭和の遠忌にふさわしいと感じさせられた靴入れ用のビニール袋を渡されたので、これに靴を

おさめて小脇にかかえ乍ら大殿に上がったのであるが、丁度その時は一日の逮夜法要の最中でとても中に入れるどころでは無かった。しかし、横の方の隙間からちょっと見えた処では、テレビのライトに照らされて浮き立つ金色の袈裟が印象的、誠に絵にしたいような美しさである。やがて法要が終り人の群が入れ替って私もやっと中へ入る事が出来たので、参拝のために大殿の奥深く進んで行った。見ると前に坐っている信者の何人かは随喜の涙を流しておられるではないか。私は宗教に於ける儀式の重要性という事をつくづくと考えさせられたのであった。そうこうするうちに、今度は大殿の中で布教が始まった。すると亦直ちにそちらに席を移して熱心に聴き入っている方々が多数ある。まことに華頂山内は熱心な浄土宗信者で一杯だ。大殿の外には十八ヶ所に有線テレビが備え付けられ、中に入りきれない人々の為に、中の法要の様子がそのまま見えるようになっていた。これは大変親切な事だと私は大いに感心し、又、如何にも現代の遠忌にふさわしいという感を強くした。

いずれにしろ、七百五十年のこの盛儀に参拝出来た私は、この多くの熱心な信者の方々をまのあたりに見て、テレビが普及し、交通機関が発達し、全てが科学的に進歩した現代に於ても、浄土宗の信仰が現実に力強く生きている事を知り、大変うれしく思い、改めて法然上人の御力の偉大さに感激した次第である。この七百五十年大遠忌の盛り上りを一時的なものと思えぬ様にそのまま持ち続けて、八百年への良きスタートとしたいものである。

上人の

遺徳を偲ぶ



藤井正雄

四日早朝京都駅に降り立った途端、行きかう団参の行列と京都市あげての遠忌ブームに先ず驚かされた。早朝にもかかわらず知恩院境内は、早くも京をめざして集った善男善女で埋まっていた。揃いの袈裟をかけ、孫から貰った小遣いをふところに、夢にまでみた

「本山詣で」の姿は、本願成就の安堵からか、その皺びた顔もほころびていた。

折しも四日は、七百五十年遠忌の中日に当り、東山高校のブラスバンドを先頭に、美しく着飾った可愛らしいお雅児さんや、岸信宏御門主以下の式衆など千五百人の「お練り」が北門を出る午前十時すぎ頃は、行列の両側は中断される処なく人垣でうずまり、三門前のバスプールからはみ出された観光バスが黒門より華頂会館に至る通りに数珠つなぎになり、十万を数える参拝団の中には、遠くから車を降りて歩く姿もみえ、引卒者が団参を呼ぶ大声も善男善女の唱える念仏、和讃の声に消えていた。

明けて五日は日曜日と重なって、朝から春がすみに包まれたのどかなひよりとあって、家族づれの姿が目立つ十三万余の人々の渦と観光バスで埋まっていた。三縁山増上寺椎尾弁匡御法主がオープンカーにのり、千人にも及ぶ正装した式衆、それに雅児などをひきつれてのお練りの行列は、前日のお練りと共にいやが上にも遠忌ムードを高めていた。両日とも団参者は阿弥陀堂からうぐいす張りの廊

下を通って大殿、焼香の後更に廊下伝いに集會堂、大万丈を経て黒門へのコースも、お練りを一目でもみようとするとする人々が沿道を埋め、女人坂から阿弥陀堂にかけては両側に坐り込み、そのため参拝者の流れが一時止まり、二時間余りも立往生するという混雑ぶりがくり返されていた。

幸いに両日とも、お練りに加わって大殿に入り日中法要に参列することが出来た私は、四日は岸御門主の日中法要、五日は椎尾御法主導師の現代語訳による日中礼讃と、団参者の焼香の煙がたちこめた大殿に、僧侶による念仏の声に和して、おのずから念仏が唱えられ、さながらこの世の極楽現出かと思われた。見るもの聞くものすべてが南無阿弥陀仏の名号に包まれて、お練りの行列を伏し拝む人も、法然上人の遺徳が偲ばれて、随喜の涙を流していた。

法要を終えて宿舎にくつろいだ人達は、孫の待ちわびる顔をおもい出してか、夜の京の町にくり出して、今日ばかりはと財布のヒモをゆるめて、土産物屋に立ち寄るドテラ姿のそぞろ足、善男善女法悦の群は続いていた。

独自の使命

隣家にテレビを設けたから我家にも、友人がウールの着物を買ったから私もなどと競争心、名利心、虚栄心のために、他と比較して自ら苦しみ、且は不平、不満、愚痴の因となる。

私には私にふさわしい生活がある。それをととのえてゆけばよい。人のまねばかりしている人は、その人の従者にすぎぬ、人の顔がみなちがっているように、それぞれに独自の使命がある。私には私以外の誰人にもできぬ役目をもっている。その私自身のもちまえを生かし、独自の使命を果すところに真に生きがいあるを知る。

夢の如く幻の如き名誉、地位、財産等にとらわれず、他にうち勝とうなどいう心をはなれて、わが使命に邁進し、他への奉仕生活によるこびを見出す人こそ、真に生きる人である。諸仏の讃歎護念をうける人である。

(藤井実応)

インスタント時代の

宗教放送



摩 尼 清 之

戦後の宗教放送も、その聴取反応は極めて活発です。戦時中に権力と習合した宗教があったため、マス・コミは宗教に警戒と反発をもっていますが、適切巧妙な番組編成をして、高聴取率の時間に放送、すれば必ず大きな反響を呼び起すであろう、というのが私の確信です。

現在朝の六時四十分から毎日放

インスタント食料が最近大変はやってまいりました。私の学生時代からこのインスタント飲料は多少はあったのですから、この即席食品が大はやりになってきましたのは、何か最近の人心と生活の様式がその背景となっているのでありますまいか。

浄土編集部から宗教放送の反響、効果について書くようにとの御意を受けたのですが、このインスタント時代に宗教放送をどう適応せしめて編成したらよいのか、実のところ暗中模索といった有様です。まあ、その苦悶の姿をちょっぴり書かせていただきますよう。よくよく考えてみますと、マスコミと宗教

というのはその性質が、一方は客観的であるのに他方は主観的で、まるで二律背反の関係のようではありませんか。ところが、この性格の違うマス・コミと宗教が、どこの国でもすぐに結ばれてしまったのです。

そして、日本では、昭和七、八年頃から、友松円諦先生の放送をはじめ、宗教放送は全教養番組のトップに立って世間をアツといわせたのでした。このことは、この宗教放送の好評を楔機として、あるいは仏教復興が起るのではないかと期待されたむきもあった位です。しかし、その後の日本の歩んだ方向と仏教の情態は御承知の通りでした。

送している人生読本の放送も真野正順先生等の助言で企画した一種の宗教放送ですが、現在十三パーセントの高聴取率で聴かれています。

その聴取者の中には米山さんという熱心な方もあります。米山さんは兵庫県立養護学校の校長さんで昨年は厚生大臣賞を受けた方ですが、この人生読本を放送開始から一日も欠かさずノートをとりながら聞いている方です。

どうも大変な手前味噌をならべ立てたようで恐縮ですが、宗教放送の現状と希望と可能性の一端を述べた次第です。しかし、私が本

当に聞いていただきたいことは、宗教放送のこのような希望的な話ではないのです。

私にも実はわからないことなのです。それは、宗教と放送とがほんとうに善き関係に結ばれ得るものかどうかという疑問です。

戦前、戦後を通じて、宗教放送は賑いながら、宗教そのものは一步一步と後退してゆくではありませんか。

宗教関係者がマス・コミの機能と技術に対する理解を深めて、宗教放送に対する対策と組織が確立できれば、宗教放送は放送として現在よりは遙かに大きな反響と効果をもたらすことが出来ます。しかし、それで宗教そのものが社会大衆の救済となるであろうか。私にはどうもわからないのです。

ご承知の通り宗教放送は最近商業放送の電波を通して益々盛んになりつつあり、テレビでもこの四月から宗教放送が始まります。にもかかわらず、私には宗教が復興するとは思えないのです。

それには色々と複雑な原因があることでしよう。しかし、これを放送の立場から考えても宗教者、殊に仏教者に国民大衆に生きた宗

教を語れる人が次第次第に減少してゆくことです。

そして、それと同時に、社会の各界に指導力を持つ人で、仏教を身につけ、仏教による人生観をもって社会を語ろうとする人々が、やはり減少して行くことです。

それでは仏教が鎌倉期のように、指導者の手を離れて、庶民大衆の信仰をあつめているか、ということでもないようです。これは一体どうしたことでしょう。私には日本の仏教が一つには、禅も念仏もおしなべて小乗化しているように思えてならないのです。すべてののはからいをして、己れ一身の幸福に沈潜して法悦のよろこびをじっと噛みしめている。戦後の日本を覆い包んでいる十六世紀の個人主義に、この仏教の独善性がマッチしたのでしょうか。

まことに皮肉なことに、罪惡に対する人間の連帯性の問題など宗教が当然その本質的な問題として取組まねばならない問題は、宗教者でない人々にその解釈と対策を尋ねねばならない、つまり、私は無宗教者に宗教を語る、というおかしいことをしているの

す。

とはいっても少年テロの問題に対しては、すべての機関が、ただ少年と右翼を罵倒するだけで、もっと人間の根本に横たわっている大きな問題に、宗教が解らんために、思い及ばずして、唯ワーワーと喚めいている指導者群。しかし、宗教界もこれまたこの問題に対して超然と黙座しているではありませんか。

放送の聴取者は年々成長発展し、番組編成技術を超えて聞き上手になります。いかにインスタント時代が来ても、その現れる尖端が本格的なピラミッドのような偉大なる底辺から現れている尖頭であることが絶対ですが、インスタント時代の宗教放送でもそのような土台から生れた放送であれば、宗教とマス・コミの二律背反の関係もどこかで連帯するのではありませんまいか。

(NHK宗教課長)

×

×

×

×

アメリカに於ける

仏教受容の一面



梶村

昇

ニューヨーク、マンハッタン島の南、所謂ダウントウンにアメリカ第一禅教会といわれる臨済系の集りがあつて、坐禅、仏教儀式等が毎週行われている。アメリカ人が三十人程集り日系二世も三四人来ている。御存知の故佐々木指月師の開拓せられた所であり、ミセスの佐々木ルース師がこれを維持されている。私はニューヨークに滞在していた二年間に三度ここを訪れた。そのうち二度は仏教に異常な関心を持っている金髪の美女ヴァージニア嬢の切なる契めによつて同道したのである。そして、一度目には

日本からヨーロッパを廻りアメリカに寄つて日本に帰る途次の佐々木ルース師に会うことができた。二度目には日本から来られた三浦老師に会つたのである。それは水曜日の夜であつた。定刻に教会に行つてると既に七八名の白人が来て雑談をしていた。三十程の座席がいっぱいになる頃鐘がなつて坐禅が始つた。坐禅といえるかどうか知らないが要するに椅子に坐つて瞑想の体勢に入つたのである。ものの十五分程すると再び鐘がなり、奥の間から老師が金色の衣に威儀を正して静々とでて来られた。正面にかかつている釈尊の

絵像の前に坐り香を焚き般若心経の読誦が始つた。一同ローマ字で書いてある心経を声を揃えて読みこれに和した。読誦が終ると老師は再びうやうやしく礼をして静々と奥の間に入つていかれた。間もなく一婦人が立上つて本の一節を読み始めた。故指月師の書かれた禅の話の一節である。十分程読んだ後に「質問はありませんか」といった。四十才位になる紳士が手をあげて質問した

「坐禅をすると、どんな効用があるか」

「曰く言い難し、汝自ら坐せよ」

「貴女は坐禅をしているか」

「イエス」

「貴女はそれによつて何かを得たか」

「得た。貴重なものを得た」

「それはどんなものか」

「曰く言い難し、汝自ら坐せよ」

ここでついに件の紳士は質問を中止した。

他に一、二質問がでたが、それ程重要なものではなかつたし忘れてしまった。ともかく二十分程質疑応答があつて、そのうちお茶になった。お茶といつてもコーヒーである。奥の間から再び老師が、今度は衣を日本着に替えて悠然とでて来られ大きな椅子にどっかと坐つた。コーヒーにつれて雑談をあちこちで

やり始めた。老師は煙草を吸いながら「灰皿」といわれた。二世の青年が鞠躬如として灰皿をもっていった。私はそれを見終つて帰ろうと思つたが、同伴のヴァージニア嬢が老師に是非話をして行けといつてきかないので挨拶だけして外に出た。

これだけの話である。読者諸氏が何かを感じとうとするには余りにも短かすぎる一光景であるが、私は色々なことを考えさせられた。アメリカには確に或る意味で日本ブームといわれるものがある。そしてその一部を占めているものは仏教であり、特に無神論的自覚の宗教としての禪は多くの関心をよんでいる。近時、ニューヨークに禅レストランと称して精進料理、玄米食を売る店さえできた程である。玄米食運動に禅をからみあわせて、これを神秘化し、あらゆる病氣は十日でなおると称し、精薄兒童を集めて玄米食をたべさせたり、二十数年来殆ど失明している人に一ヶ月つづけさせ、完全失明にしまつて訴えられるという騒動まで起した人もいる。全学連が騒いでいる際中であつたので「全学連と禪は何か関係があるか」と質問されたことも一再ではなかつた。ともかく禪は或る種のブ

ームを起していることは確かである。

私とその坐禅の集りで、三四の人々と話した結果は禪が一つの精神療法として感ぜられていくということである。人間のオートメーション化、社会の目まぐるしいスピード化のニューヨークという世界の大都市の中で、ともかく一週に二、三度精神を落着かせて瞑想するということは精神療法には非常に効果があるのである。「私は貴重な経験を得た」と答えた一婦人も決して嘘をいつているのではなからう。それを日本的な禪の悟りという風に考えると眉唾ものと思わない訳にはいかないが、精神療法だと思えば、肯けないこともない。

仏教は高遠だ深遠だといつて結局は何のこともだか分らないで、凡そ非仏教的な生活をしている。そういう仏教はアメリカでは受け入れられないのである。何もアメリカに限ったことではなく日本でも受け入れられないのであるが、長い伝統に育かれた日本では何となく息をつないでいくことができるだけである。明治以降近代仏教学の発展は著しいものがあり、優れた業績が幾多発表されてきたが、こうした業績も各宗団の信仰には殆ど影響の痕をとどめず、両者は関連のないまま夫

々の道を歩んでいる現状である。仏教だけが中世のままでであると評せられるのも無理のないことである。アメリカのこのような仏教受容が進んでいる段階にあるというのではない。しかし、仏教はこういう形で伸びつつあるということはいえるであろう。以上はアメリカの庶民の中の仏教の一断片に過ぎないが、学界においても心理学の発達しているアメリカは禪を精神医学的にまた精神分析学的に研究している著名な学者もいる。確によかれあしかれこの方向はアメリカの仏教受容の一契機をなすものであろうと思う。

勿論、これはアメリカ仏教の一面に過ぎないし、アメリカの仏教を語るに当っては日系米人間の日本仏教伝播を逸する訳にはいかない。日系米人も既に一世の時代は後十年であり、後は二世三世の時代になると日本への郷愁と結びついた仏教だけでは済まされなくなってくる。事実昨年九月ニューヨークのアメリカン・ブッディスト・アカデミーで開催されたアメリカ東部仏教青年大会は二世三世の主催にかかるものであつたが、その時の共同課題は「仏教の無我と物質主義との関係」というものであつた。日本の仏教は果してこれに何と答えるであろうか。

念仏をなつかしむ



忘れ得ぬ円成寺さま

それは筆者の古い思い出話であるが、筆者がまだ小学校へ入学したか、しないかという幼少の頃のことである。明治三十四・

五年の頃といえ、まだ日露戦争の気配すらなく、まあ平和なよい時代であった。筆者の生家は濃尾平野の一角、一昨年の伊勢湾台風で有名になった海部郡という田舎にあった。代々浄土真宗大谷派の檀家として堅い信仰の家柄で、時々布教師を招いて門徒のお説教の会座を開いたりし、後生のお

話を飲んで聞いていた。筆者の祖父は從つてお寺さんになじみが多く、方々の寺へお参りしていた。そのうちでも筆者の印象に最も深く残っているのは、浄土宗の円成寺という寺のことである。

円成寺といえ、名古屋の西在きつての大寺で、その昔、山下現有上人が住職していられた。筆者の祖父は、現有上人を「和上さま」と称んで深く帰依していた。筆者は祖父につれられて円成寺に参り、現有上人のお居間でお菓子などを頂いたりした。祖父が上人とお話している間、筆者はお庭

を飛びまわったり、池の鯉にいたずらしたりしたものであったが、ご本堂へ行つて「南無阿弥陀仏」することを忘れなかった。いつ行つても「ご本堂」では、尼僧さんがゆっくり木魚をたたきながら念仏申していた。あの木魚の大きかったことを今も覚えていた。六・七歳の筆者が立つてもまだ届かないので、尼僧さんに抱きあげてもらつて、やっと木魚をたたかしてもらつたほどである。そこでは四六時中、念仏の

声がたえない。不断念仏といのであるが、筆者は余り詳しいことは知らないが、とも

那 須 政 隆

かく三百六十五日断えることなく念仏を続

念仏する心

けるということは容易でないが、しかしその念仏の声にうながされ、幾何の人々が念仏の有り難さに頭をさげ、掌を合せたことであろうか、筆者も子供心の一徹で、尼僧さんの念仏に唱和して、念仏三昧にひたつたものである。この円成寺で今一つ忘れ得ないのは、「時」^{とき}をつげる梵鐘の音声である。「時」は昔流の「七ツ八ツ」というもので、二時間おきに梵鐘を打ち鳴らして、四周の人々へ時をつげるのである。これも昼夜の別なく撞き鳴らされるのであるから、夜中、すべてが眠りのどん底に落ちついた大空を、ウンウン響きわたって人々の魂にふれてくる、それは何んとも名状しがたい清寂さである、祖父父母は、梵鐘の響きに酬えるかのように「南無阿弥陀仏」と念仏申したものである。あれからもう五十幾年も経っているのに、現在はどう変っているか解らないが、もし昔のままの不断念仏や時の梵鐘が相続せられていたら、それこそ本当に末世の奇特としてたたえなければならぬ。

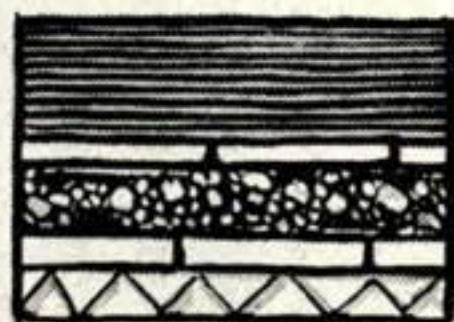
法然上人が浄土門を聖道門からきり離して独立せしめられたには、末世の私たちが想像する以上に、深い理由があったにちがいないであろう。筆者は浄土真宗の家に生れ、朝な夕なに念仏申すしつけを受けながら、今は真言宗に活きる身の上となつてゐるが、それは全く不思議な因縁というの外ない。法然上人が真言宗を聖道門としてきらわれたとしても、そのことは今の筆者にとつては少しの障碍になつてゐない。今ここで教義の講釈をしようなどとは全然思つてゐないが、真言宗の教を受け、その道で生死解脱を求めて来た筆者には、念仏申す心と、真言する心と、何らの矛盾もなく、一つのものとなつてゐる。こういうと浄土門からは、お前のは「自力の念仏だ」と叱られ、また真言門からは「浄土教的だ」とか「他力門に墮した」とかと非難されるかも知れないが、そうした三十棒は甘んじて受けようと思う。今の筆者は、自力だの他力だのと、とかくの議論をすることから解放されてゐたいのである。他の人々から支

えてもらえないのは止むを得ない、ただ独りでよい、「この道」をとばとば辿つて行きたい。仏教が教える真理は、自他の觀念を超尅するところに待ち迎えている筈である。自力でもない、他力でもない、いや實際には、それは何れでもよい、何もかもうち忘れて念仏三昧になりきる、それがそのまま私の真言三昧でもあるのだ。

現代は「平和」を売り物にして、自己の立場を押し拡げていこうという世の中である。それが可否を議論して見ても結局は水かけ論に終るだけである。ただ言えることは「そういう心でゐる間は平和は決して訪れない」ということである。西も東も、労働も使も、すべての人々が「念仏する心」になることが、何よりも基本的な望ましいのである。人々は今少し謙虚になれないものだろうか、人権の主張や自己の誇示も可いが、しかし余り過ぎると「思いあがり」になり、かえって自己を亡ぼす結果を招くことになる。もし人々が念仏する心になり得たならば、自分の心も安楽になり、世の中も平安になるであろうが。

(文学博士、前大正大学長)

念佛のひびき



須藤 隆 仙

お念仏の説法

お釈迦様が、悩める母親、韋提希夫人いだいせのために、お説き下された『観無量寿經』の中には、「除若惱法」という言葉が出てくる。文字通り「苦悩を除く方法」であって、それが『お念仏』である。

お釈迦様が説かれた仏教の法門は、俗に八万四千といわれている。それほど数多くの法門を説かれたのであったが、その中、大乘の經典の三分の一強は、アミダ仏に關したことが説かれているのである。そして、学者の御教示では、小乗の經典の中に

も、アミダ信仰の原始的形体が見られる、というのであるから、仏教はアミダ仏の信仰を本流とする、ということがいえるのである。支那天台九祖の妙楽大師は、ために「諸經讚ずるところ、多くミダにあり」といって驚かれたのであった。

一体どうしてお釈迦様は、こうアミダ仏の信仰、即ち『お念仏の法門』のみを、多く説かれたのであろうか。このことを深く考えてみたい、と思うのである。

説かれた所以

元祖上人は『三部經釈』というお書物の中

で、次の如く、仰せになっておられる。

「ここに釈尊はつそうじょうどう八相成道を五濁惡世にとなえて、放逸邪見の衆生の出離その期なきを哀れみて、これより西に極樂世界あり。仏まします。アミダと名づけたてまつる。(中略)出離の道多しといえども、惡業煩惱の衆生の、とく生死をはなるること、この門にすぎたるはなしと、教えて、云々」

即ちお釈迦様が、アミダ仏の信仰を教えられたのは、「放逸邪見」「惡業煩惱」の衆生のためだった、というのである。

このことには、今一つの裏づけがある。お釈迦様は、正像末しょうざうまつの三時の教え、さんじというもの

を説かれている。これは仏教上の一つの歴史的 세계観で、正はお釈迦様亡きあと五百年、仏教が盛んな時代であり、像はそれから千年間、仏教がやや衰える時代であり、末は以後一万年、仏教は全く衰えて、教えだけがあっても、行ずる人がない時代で、しかも末法の世には五濁じよくといって、五つの濁り（時代の濁り、思想の濁り、心の濁り、人の濁り、生活の濁り）が出て、世の中は、全く悪業煩惱の「かたまり」となる、というのである。それでこの末法の時代こそ、念仏の教え、アミダ仏の信仰は、ますます真価を示す、ということがいわれ、お釈迦様は特に「無量寿経」の中で、末法万年すべてお経が亡くなっても、のち百年間だけは無量寿経のみは留まる（残される）、と仰せられているのであって、即ちアミダ仏の信仰のみは、末法の世にもっとも必要のものであることを、強調されたのである。これがいわゆる、「念仏は放逸邪見、悪業煩惱の者のために説くのである」ということの裏づけであって、末法は放逸邪見、悪業煩惱の者のみの世界だから、特に念仏の教えが必要とされ、無量寿経が留められるわけである。支那の慈恩大師は「末法万余経悉く滅するに、ミダの一教のみ物を利して、ひとえに増す」といっておられるが、このところは重大なところである。

お念仏の流れ

さてかくの如く、お釈迦様が、罪深い泥凡夫のために説かれたお念仏は、その後秀れた念仏者の出現によって、一つ一つ、その中の尊い価値が開けられていき、遂に元祖法然上人にいたり、完全な真価に輝く宝玉となったのである。

まづ二、三世紀ごろインドに出現した竜樹菩薩は、念仏は「行い易い」方法で、しかも一たび唱えることによって、仏の道にいたる（成仏）地位を確立することができるという、念仏の偉大さと、方法の簡易なことを称讃されたのであった。そして自身もアミダ仏に帰依されたのである。

つぎは天親菩薩である。五世紀頃やはりインドの人であるが、「無量寿経優婆塞舍願生

偈」という書を作り、その冒頭に「世尊われ一心に尽十方無碍光如来（アミダ仏）に帰命したてまつり、安楽国に生ぜんと願ず」と第一人称をもちいて、アミダ仏に帰命する意を告白したのである。優婆塞とは梵語ウパデージャで、論議という意味である。即ち無量寿経に関する論文の意味をもった願生の歌、というのが、この本の題名であって、別名「往生論」又は「浄土論」ともいわれ、元祖上人は三部経と並べて、これをただ一つの浄土論部とされたのであった。この中には又、五念門ごねんもんという、五つの念仏行者の行が説かれている。先の「世尊われ一心に」を曇鸞大師は「心心相續して他想間雑することなし」と釈されたのであった。即ち念仏における「一向専念」「一心不乱」ということが示されているのであって、天親菩薩は念仏における「信と行」とを問題とされたのである。

この後、曇鸞大師が支那に出られた。以下は皆支那の方になるが、大師は五世紀から六世紀にかけての人で、先の「往生論」の註釈書を著し、特に「他力」ということを強調されたのであった。自他・他力という言葉を教

えたのは大師である。念仏によって往生できるのは、他力、即ち仏の本願力によることを説かれたのである。特に大師が説かれた有難いものに「氷上燃火」のたとえ、がある。これは深い念仏の眞理性を、一つの比喩であらわしたものであつて、念仏は執着の火の如くに思われるが、氷こおりの上で火を燃したようなもので、もともとは仏の本願力という無執着の氷の上で燃えているのであるから、その火により氷が解け水となり、火は消える、というのである。即ち、念仏は浄土を願ひ、仏に救われることを願うのであるから、執着の強い教えて、無執着の仏教の教えと反対のものではないか、という非難の立場を、説明されたものであつて、アミダ仏の本願という仏の力（無執着の悟りである）の上に燃えるわれわれ凡夫の願ひの火を、氷と火とのたとえで見事に説明されたのである。

師が初めてである。それは禪師の出られた時代（五六二―六四五）が、すでに末法に近くなつていたからであつた。特にその頃は、お釈迦様入寂の年代にいろいろの異説があり、この頃すでに末法に入っている、という説もあったのである。それで禪師は眞剣に、末法という「時代」と、そこに生きる「人間」とを考えたのであつた。そしてこの時代（時）と、人間（機）とに相應する法門、即ち時機きき相應さうおうの法門こそ浄土念仏の門である、と強調されたのであつて、その著『安樂集』の中にこれが詳しく述べられている。特に聖道と浄道という二門の立て方は、禪師によってなされたのであつて、これ又重要なことであつたし、その外、アミダ仏が第十八願に誓われた念仏は「称名」（口に唱える念仏）であると明示されたのも禪師であつた。

この後、七世紀中に出た偉大な人に善導大師がある。善導大師は、古今楷定ここんかいじようといつて、これまで他宗の方から誤つた浄土観が説かれていたのを、正されたのであつた。その大きなものに「凡入報土ぼんにやうどの説」というのがある。報土とは、アミダ仏の眞実の浄土で、凡夫が

扉の御法語

釈尊御在世中に生れ合わせなかつたのは悲しいことであるが、仏法にあり、お念仏を申せる身であることは、盲亀が浮木にあつたと同じく全く稀有な有難さであります。盲亀浮木のたとえは、生れ難き人身をうけ、逢いがたき仏法にあつたことのできたこと、まことに得難いことのたとえです。涅槃經に、大海中に盲亀がいて、百年に一度だけ水面に頭を出します。また一方に孔のある浮木があつて、浪にしたがつて漂流しています。この亀が、この浮木にあつて頭を孔に入れるという話であつて、めつたにないことの意味です。

この御法語は登山状（元久法語）の一句です。登山状は特に美文であつて、流麗さに氣をうばわれますが、また猛烈な念仏反對をしていた南都北嶺の人々に向つての公開状であるだけに、美しい文の下には、激しい上人の信念がこもっています。登山状はかなりの長文ですが、結局のところ、扉の御法語の通り、仏法にあり、お念仏を申す身の有難さをいかに感じとるかが根本であつて、盲亀浮木にたとえた上人のこの感激なしには、いかなる教えもよくは解し得ないと思ふのであります。

上人のこの感激を味うために、更に登山状を引用させて頂きます。

「あるひは金谷の花（金谷は華に酔う地であり、また晋の石崇が客を招き宴を催した地）をもてあそびて、遅々たる春の日をむなししくくらし、あるひは南樓の月（晋の元

報土に生れる、ということを強調されたのである。それまでは他宗の方から、凡夫が報土に生れるのは、おかしい、という疑問が出ていたのであった。仏教の原則からいえば、凡夫であるから悪い世界へ生れるのが普通であって、凡夫が良い世界に生れるのはおかしい。もし生れたとすれば、その世界がニセの世界か、さもなければ凡夫でなく聖人だったのである、というのである。これに対し大師は、やはり仏の大慈悲ということを強調され、凡夫であるからこそ良い世界に救おう、と仏は哀みたまうていたのであって、聖人ならば救う必要はないのである、と、浄土教本来の真価を力説されたのである。

元祖上人のお念仏

かくの如く、お釈迦様によって教えられた念仏は、代々の秀れたる念仏者（特に以上のような方々を浄土の祖師という）によって、その一々の価値が明かにされていったのであり、元祖上人にいたり、それらを全部網羅されたものが組織完成されあので

ある。そのすべては『選択集』の中におさめられており、その完成された念仏こそ、「浄土宗の念仏」なのである。

法然上人の御歌

月かげの至らぬ里はなけれども

ながむる人のところにぞすむ

春

さへられぬひかりもあるをおしなへて

へたてかほなるあさかすみかな

夏

われはたたほとけにいつかあふひくさ

こころのつまにかけぬ日そなき

秋

あみた仏にそむる心のいろにては

あきのこすえのたくひならまし

冬

ゆきのうちに仏のみなをとふれば

つもれるつみそやかてきえぬる

△△

△△

規が月を賞するため建てた楼のことで、ここに登れば月千里に明なりといわれたもの（を）をあざけりて、漫々たる秋の月をいたづらにおかす。あるひは千里の雲にはせて、山のかせぎ（鹿）をとりてとしをおくり、あるひは万里のなみにうかびて、うみのいろくづ（魚）をとりて目を重ね、あるひは厳寒にこほり（氷）をしのぎて（こらえて）世路をわたり、あるひは炎天にあせをのこひて（汗を拭って）利養をもとめ、あるひは妻子眷属に纏はれて、恩愛のきづな（妻子は無始曠劫から生死に輪廻する絆）きりがたし。あるひは讎敵怨類にあつて瞋恚（心に逆うものに対する怒り）のほむら（いくつもの炎）やむ事なし。」

と春夏秋冬の人のさまをのべ「かくのごとくして、昨日もいたづらにくれぬ。今日も又むなくあけぬ。今いくたびかくらし、いくたびかあかさんとすると、有名であり、痛烈なお言葉が続きます。このように、登山状を拝読してゆくと、紙数が足らぬことになりませんが、上人の無常感とお念仏。有難さの御詞は、実に深く説かれてゆきます。そして死後に後悔してもおいつくわけありません。毎日の生活に反省が深ければ深い程、お念仏が口をついて出てきます。それなのに私たちは仏法に慣れ過ぎたところが無いでしようか。感動が薄らいでいないでしようか。仏法に対する感激を、盲亀浮木のたえの通り、今一度自分の心にいいきかせたいものです。」



近代高僧伝

都芳随圓

大橋 俊雄

近江の国には早くから仏法がさかえ、その後法然上人によって浄土教がとなえだされて以来、仏教王国の名にはじないほど仏教は民衆の間に浸透し、江北が真宗王国ならばさし

本校に学んだ。殊更學問を好んだ彼は高等正科から専門科に入り、当代華嚴の第一人者とうたわれた山本嚴識について華嚴學を究めた。

つめ江南は浄宗王国ともいうべき土地になった。ここ比叡の山波が東にせまって琵琶湖に接するところ大津の町に随圓が呱呱の声をあげられたのは、江戸幕府もまさにたおれんとする慶応三年二月二十二日のことであつた。父は村井弥七といい、彼はその次男として生れ、明治十二年三月野洲安養寺の順譽隨源の門に入って出家し、同十年には知恩院の大学林に入り、更に二十年には上京して浄土宗学

そして一時三十二年九月には招かれて東京伝道院講授となつて教壇の人となつたけれども、吉水賢融が知恩院執事となり組局にあつて、彼は請われて法教科長となつた。当時の知恩院内局は一執事二科長制になつていて、執事は今の執事長にあたり、この下に會計科長と法教科長があり、時に會計科長に就任したのは野上運外であつた。明治三十三年六月のことである。その頃の知恩院は祖山と

は名のみで、漸く財政の立てなおしができたとはいふものの、未だ充分復興したわけではなく、その上阿弥陀堂の再建をかかえ賄所の經濟は容易ならぬものがあつた。或る夜のこと、九州地方の巡教をえ終えた一巡教師が帰山し報告をなされたとき、彼は押入れから酒と味噌折を出し、科長自から給仕して此れを遇したといふのも、科長が酒の用意をしていたからできたことであつたが、全く本山の生活は粗衣粗食の耐乏生活であつた。しかも時の吉水執事は短氣な方で、時折り大雷をおとされることもあつたが、随圓はよく避雷針の役をつとめ、在山中一人の怪我人も出さなかつたといふ。彼のように誰彼の差別なく巡教を終れば科長室に呼んで、酒を互にくみかわされた人情味の厚い彼の人柄は、人望をあつめ、いつか本山布教を盛んならしめ、募財もすすみ、高等講習会にしても安居にしても次第に聴衆が集まるようになってきた。

その後四十三年九月には推されて専門学院教授となり、大正七年二月には安土浄嚴院にすすみ、同九年仏教専門学校長となつた。越

えて十五年二月黒谷金戒光明寺法主となり、在山十二年の後、昭和十二年十二月一宗の興望をにない、知恩院八十一世の法燈をついで浄土宗管長に上任した。知恩院に在山していた十七年八月、前仏教専門学長の福島愍雄がなくなり、自坊空也寺で葬儀がとり行われた。彼は大導師に招かれ、何時ものような差定で無事式もおえ、今や猊下の本尊前三拜で退堂を待つばかりであった時、突如として彼は仏前に正座し、声高からかに「願弟子等」ととなえられた。おどろいたのは式衆である。尻をあげかけた列座の人達は、思わず座わり直して、「臨命終時心不顛倒心不失念……」とそのあとをつづけ、上下一様に念仏一会した。異例の葬儀にもかかわらず、その念仏たるやまことに真剣で、またとない緊張した雰囲気の中に熱心に相続され、参列した者をして「試に有難い葬儀であった」「その真摯な光景は忘れがたいものである」と述懐させたのであった。資性温厚まれに見る字徳秀いでた彼の性格はここにも如実にあらわれてい

るような気がする。

増上寺での加行者伝法の際のこと、大殿左方の会館に止住されていた大僧正を、見知らぬしかも身なりの粗末な労働者風の男が、夜になって、訪問された。縁山の係の人はことわりましようかと申出られたが、随待していた弟子随潤はともかく通してみようというところで奥の間に通したところ、恰かも旧知の間柄であったかのように、「労働問題はとかく老人にはわかりません、念仏の道だけよりお話ができます」という大僧正のお言葉も謙遜しがちで、いつか心やすくうちとけて話しかかれたという。東京は不意に思わないことがおきるもので、それにしても大らかな心持とあたたかい思いやりが、見知らぬ労働者にも接し信仰の種をまくことができたのであった。このように彼は何時でも誰とでも心おきなく接し、一人でも多くの人に念仏の喜びをわかちあたえようとなされたのであった。

十七年五月には彼の前任で門主をつとめた岩井大僧正が遷化され、歴代上人の墓地に墓塔建立を企てたことがあった。近侍の人たちが、建立すべき土地を物色したが思うように見当らず、「知恩院山上の歴代墓所に空地がありませんのでどうしたらよいでしょうか、辛うじて孝誉（現有）大僧正の後北方にあるばかりで」と申されますと、「願誉（智海）大僧正にすまないが、俱会一処で御辛棒願うように」とのことであつたという。大東亜戦争も緒戦で大成功をおさめたとはいふものの、諸物資の欠乏が次第にみえはじめた頃のことである。それでも何とか建てねばということと、随潤は小林執事長と相談し、大僧正の趣旨に従って墓石の注文や建立は天神さんの抱介になり、智海の信者と随潤が折半式して費用を出しあい。「紹隆塔」という墓塔を建てられた。この塔は彼の命名で、以来これが歴代門主の納骨所となった。そのような彼は常に前門主の偉徳をしのんで墓地をしつらえ、又追恩のかたみとして大僧正の遺文集ががでた時「鈴泉遺芳」と題簽をものし、智海は下山にあたり「宗制の条規により相誉大僧正を推す、希くは一宗道俗老衲の微忱を察し、同心協力新管長の下須く宗光を發揚し国運の進展に貢賦すべし」と述べて、共にその徳に敬意をはらっていたが、その彼も二十一年一月二十七日病床にあること僅か三日にして安養の浄土に旅立たれた。世寿七十九、法名を一蓮社相誉上人入阿毘水大和尚という。

大師御生活の管見

重源大和尚

村上博了

時は中秋である。南都奈良の若草山も色づき山野の紅葉も日に映えて美しい、猿沢の池にうつる樹の姿も、どちらが本ものか一寸判らない位であり、底に沈んだ紅葉も手にとれるように見えた。

大気又清澄、東大寺興福寺の鐘声もゆるく流れて人心をうつものがある。大仏殿大勧進職俊乗房重源は、指図堂にあって、大仏殿再建に当り、よき大工棟梁を発見することに心をねっていた。

大仏殿は日本ばかりではない、中国にまで聞こえている建造物である、再建中途で大工を替えることは至難である。始終一貫してやりとげる大工の器要を見出さなければならぬ、さてと静かに目を閉じたので

ある。

やがて京畿内に触を廻して名のある大工棟梁を集めた。重源は黒衣素足の平常着姿で彼らの前に現われたのである。

皆さん、御苦労さまです。この度の工事は前代未聞というべき大事業ですから、皆さん達の御協力と支援をお願い申し上げます。私としては「たるきの下に、木舞を打ちたい」と思いますが、どうであろうか。

棟梁達は、互に顔を見合せていたが、左よりの屋づくりは、未だきいたことがありません。

という答であった。その時重源大眼を見ひらいて、

わしに思うことがある、ただ造れよといわれたのである。答あり、あるまじきことをやって、同職衆に笑われるから否です。

という。他の多くの棟梁番匠らも同意見で

あった。ところが一人のものが静かに頭をあげて、

はい、よろしうムいます。私はそのような屋造りをしたことはありませんが、お教下さい、やりましょう。

という。呵々大笑した重源は、

本当に、そのまま造れよとする訳ではない、ただこの大事業完遂に対する大工棟梁としての心構とその在り方を知りたかったのである。皆さん悪くにとって下さるな、

といったと伝えられる。

その棟梁を起用している。そこに周到な用心を見る。当時「支度第一俊乗房重源」と評されていた。先づ勧進の順序として京都に入り、皇室と殿上人の賛助を得、諸人に対して一輪車六輛を造り勧進と旗と念仏名を記して親しく庶人に接し念仏をすすめる勧進している。かつては入宋、法然上人の要請に応じて浄土五祖像並観経曼荼羅等を請来している。

(イ)

重源(一一二〇—一二〇六)と上人につ

いては勅修御伝中七ヶ所に見えている。重源は俗姓を紀氏といい、豪勇の長谷雄の末流滝口季重の子で重定と称したが上醍醐の僧徒となり、真言宗の薫修が深い高德であった上人のすすめる念仏に帰して往生をねがい、師資の礼を厚くし上人に帰信していた。文治二年の秋、洛北大原の里魚山大原寺勝林院で、法然上人を囲む「浄土を語る会」は、当時としては大問題であって、よくいわば、上人から浄土宗をきく会ではあるが、とりようによっては、上人をつるし上げとすることもあり得た訳である。

かたや南都北嶺の名だたる碩学者明遍証真静嚴貞慶智海等をはじめ山徒の人々である。これに対して上人の方としては、重源がその門徒三十有余人を引きつれてお伴している。聴衆の多くは武装した山徒であり大原の聖達であった。上人に味方をする筈がない、重源達も、師表である上人に万一のことがあった時には、一大決心が必要である。上人時に五十四才重源六十六才であった。前巻に述べたように満座の人々、上人に信伏し念仏行道すること三日三夜、伝えきいた人々も信を起す者が少くなかったのである。

この頃から重源は「南無阿弥陀仏」と号している、浄土宗侶の「阿号」のはじめとなった。この一事は、大原問答に於ける上人の偉大なる感化教化の結果である。重源は建仁三年八十四才の老眼を拭いながら南無阿弥陀仏作善集を作り、建永元年六月四日東大寺にて寂している。八十六才であった。東大寺大仏殿に向って右側にある念仏堂は重源の全国七ヶ所に残した念仏堂遺跡の一つである。

(ロ)

人あり重源は法然上人より十二才の年長である。上人の門弟とするは誤りなりという、果して然るか、僧職は猫や亀ではない年輪が多いから師弟ではない後人の作りごととする。私はそう思わない、慧解が上であれば、年下の人に対してもその学問上は弟子の礼をとる。仮令ば上人と叡空上人の場合がある或は上人と蔵俊の場合がある、前者について見よう、時は近衛天皇の久寿元年上人二十二才の時の出来ごとである。両者は円頓一実の戒体について研究していた時、その道の大家といわれた叡空は「心をもて戒体」と主張、上人は「性無作の仮色」といい、相対立したのである。問道多時、叡

空はとうとう立腹して、吾れ知らず傍にあった木枕で上人を打ちその場を立ったのである。数時間の後に再びやってきて、御房の申される旨は、はや天台大師の本意にかなうとほめている。御伝には「かかりければ、上人をもて軌範として師かへりて弟子となる」と伝えている。

又安元二年上人四十四才のときのことである。上人は「往生の業」について、

称名にすぎるた行、あるべからず

といわれた、きかれた叡空は「観仏すぐれたり」と主張する、これに対して上人は

称名は本願の行はるゆへにまさる

と答えている。叡空は「先師良忍上人も観仏すぐれたり」と仰せられているという、

上人は、良忍上人も、さきにこそ生れたる

という、又叡空上人は立腹されたが、上人

は善導大師の釈文をひいて懇篤にその来由をのべ叡空の能受するところとなっている

研究は真剣であれば真剣であるほど、の

びすすむもので、反対の為の反対でなく、

判れば光風晴月あとを残さず共にすすむと

ころに高僧らしい特色とよさがある。

明日は花まつり

高 橋 良 和

照純（しょうじゅん）や、そろそろ花御堂を出してそうじしておきな。

お父さんの昭英（しょうえい）さんはくりの方で声をかけました。

はい。

げんきのいい照純の声が台所の方できこえました。

照純は本堂の裏のうすぐらいしゅみ壇の下の戸をあけますと、くもの巣のかかったなかから花御堂をとりだしました。

お父さん これは水をかけないとよごれますよ。

そうかい、きれいにあらっておきな。

照純はすぐさま花御堂をもって井戸のころまでまいりました。ザアザアと水をながしかけると、もとのきれいな花御堂になりました。

お父さん、この花御堂をどこにまつのです。そうやな、いつもの通りに本堂の外へんがわにかざってごらん。はい。

照純はお父さんにいわれた通り、えんがわに机を二つならべて、その上に白いきれをか

ぶせた上に花御堂をのせました。

これでいい、あしたはまた村の子供たちがたくさん花もってこの小さい御堂にさしてくれるだろう。

そんなことをいいながら照純がひとりで、かざりつけをしていますと、お父さんの昭英さんがくりの方からやってきました。

よしよし、これで用意が出来たな、あの照純や、ほら花まつりには甘茶をわかつて村の衆にわけてやるが、この頃は甘いものが出廻ってあまり甘茶をみんなよろこばんな。お父さん子供は甘茶がすきやないって。

そうや、昔とちがって甘いものがうんと家にあるからな。

でもお父さん花まつりには甘茶がいるのじゃないの。

それはそうだけれど、お釈迦さまがあゆるンビニーの花園でお生れになったときに、空から天人が甘茶をそそいだというので甘茶でお釈迦さまのからだをお浄めしたというのだからな。

照英さんはいつものお説教のような口調でいいました。

こうして照英さんと照純とが、本堂のえんがわで花まつりのじゅんぴをしているときに、門の外を子供たちが手をとってかえてゆきました。

おい、あしたはお寺の花まつりだよ。

みんな甘茶をもらいにいこうね。

三々五々かえってゆく子供たちの声が照英さんの耳にも入りました。

照純や、今子供たちがかえっていったけれど、あのーあしたの花まつりに一つ甘茶にかえてジュースをあげてみようかな。

お父さんそれはきつとよろこばれるよ。

照純もすぐさんせいしました

それで照英さんは、うれしそうにくりにもどつてくると、家族のものにいいつけました。

あしたの花まつりには子供たちにジュースをあげるのや、ジュースのもとをたくさん買ってきておくれ。

こんなことから今年の花まつりには甘茶にかわってジュースをみんなにあげることになりました。

みんないらっしやい

花まつりにジュースをあげます。

照英さんが墨くろぐろと紙に書きますと、

照純はよこでジーっとみて笑いました。

お父さん、ちょっとジュースじゃへんだけれど、子供たちはよろこぶかもしれないよ。そうとも、明日はうんとジュースをのましてやろう。甘茶のかわりにな。

照英さんは何枚も何枚もポスターを書きました。

明日は花まつりです。

ジュースをもらにくるうれしそうな子供さんのすがたを思いうかべながら、照英さんと照純はにっこり笑いました。

(おしまい)

(童)(心)(仏)(心)

考えるこども

作文の宿題を家に持ち帰った英夫君は、遊びたい心をじっと押さえ、机の上の作文用紙とにらめっこをしていました。

そこへ、おかあさんの声です。

「英夫。まだ宿題はできないの。」

「うん。まだ。」

「なにしてるの。早くやって、お使いに行つて来て頂戴よ。」

そう言われれば、言われるほど、英夫君の心は落ちつかなくなってきました。

「あーあ。書けないなー。」

英夫君は、机の下に足をのばして横になりました。

また、おかあさんの声。

「あら。寝てしまったら駄目じゃあないの。」

「寝てるんじゃない。考えているんだっ。」
英夫君は、作文の構想を練っているんです。ほつといてあげてください。おかあさん。

(輝)

西池園記



牧尾良海

一

侯誠叔という人があった。潭州の出身で

あったが、かなり前から都へ出て来てい

て、筆耕をしながら生計を立てていた。都

の官吏で彼の家とは古くから交際のあった

知人の庇護もあったので、あちらこちらの

役所から仕事を貰っていた。そのうちに、

さる大官に従事して兵役に出て、いい具合

に功名兵階も上り、臨江軍の中隊長を授け

られた。彼はこの時二十八才になっていた

た。まだ独身なので、二三の方面から嫁を

という話もあったが、どれにも良い返事を

出していなかった。

或る日のこと、友人と誘いあって郊外にあ

る西池園へ遊びに行った。

この日は夜来の小雨がすっかり晴れ上っ

て、空気は清々しく澄みわたり、水面には翠

の光がゆらめく様であった。梢の花はしつと

りとしめりをふくんで、紅い色は匂うばかり

である。見晴台に上って四方を眺めやると、

今にも妙なる管絃がわき起って来そうで、の

どかな春の空気の上の底に沈んでいる

と、若い生命がうづく様に意識せられた。

誠叔は、友人と肩をならべてあちらこちら

とそぞろ歩いてから、やがて長橋を渡った。

る。

池の西の方は寂しい所なので、入園客はふ

だんあまり来ないところなのに、あの女性は

独りで来ているが、どうも妙だ、何か訳があ

るだろうか——誠叔は心秘かにそう思ったの

で、あとをつけてみようかと友人に相談したが、

友人はとり合おうとしないのでやめることに

した。日はもう西に傾いたので、西池園の門

から出ようとする、例の女性のお伴をして

いた若い女中がそっと誠叔を呼びとめて、

「これ、お嬢さんから貴方様にあげるよう

にいいつかって参りました。」

とて、一通の手紙らしいものを手渡した。誠

の女性が女中をひとりだけ従えて遊びに来たものらしく、やはりあちこちの風景を賞しているのが見えた。大層美しい女性であったが、この時は誠叔も格別気にとめなかった。

その翌日、誠叔はまた友人と西池園へ出かけた。長橋の中程までやって来ると、昨日の女性が今日もまた同じ場所に来ているのであ

叔は、友人に判らぬよう急いでそれを懷中にしまいこみ、何食わぬ顔で友人の後を追った。家へ帰って、開いて見ると、一首の詩である。

「春三月、人それぞれの恋ごろも、

池上の風光、値は万金なり。

さいわい、帰路に桃源郷あり、

才子何ぞそれをおとなはざるや。」

「今度又、例の所にてお目もじを。」

誠叔はこの詩が気に入った。ただ、字体はたどたどしくて、六七才の子供が書いた様に稚拙である。

約束した日に出かけて行って、西池園のはとりでその女と会った。誠叔は、盗む様にして彼の女の方を見ると、物語に出て来る西施の様に艶麗で、趙飛燕の様になよなよとした肢態である。言葉使いも輕妙奇智に富み、誠叔を見返す眼元の美しさの中には、溢れるばかりの情がこもっていた。二人は、池園の中を逍遙してから又西岸へ行った。試叔が女の姓を尋ねると、

「妾の姓は独孤と申します。都城の北の方に住んでおりますの。この次のときは、

屋敷の方へお招きしますわ。」

というのである。さんざんその辺りを歩きまわって又池の西の所へ帰ったが、その時も一通の手紙を誠叔によこした。書面には、

「今日はいとこの婚礼がありますので、池

園で人と会う約束があり、貴方をお迎えすることが叶いませぬが、この次の折には是非とも。」

とあった。誠叔は、帰宅してからその手紙をよく見ると、又、詩が書いてあった。

「碧波の西を独歩せしこと、そも幾たび、

これよりは君を思ひて帰路迷ふべし。

我すでに情あり、君も意にかけ賜ふ、

相携へて共に桃溪に入らん。」

その日は、次の日を約して別れたのであったが、翌日は朝から風雨が激しく吹きつづけていたので、午後、ややおさまったのを待ちかねる様にして乗馬で行ってみた。ぬかるみがひどくて、池園の中は、どこを見ても人の子ひとり来ていないのである。誠叔は、ひどくがっかりして馬を回そうとしたとき、名を呼ぶ者があるのでふり返って見ると、例の女

中が一人で立っていた。

「今日は道がひどいので、遠くからでは何の乗りものもなく、お嬢さまはおいでになりません。貴方様にと、詩を預って参りました。」

女中のさし出したのを見ると、次の詩が書いてあった。

「春光水に入ればあくまで碧く、

野色は、見る人の心によりて映ゆ。

頻りに問ひ賜うに相見えること叶はず、

吾が家は杏園の東にこそあり。」

女中はそのまま行ってしまったので、次はいつという約束をすることもできなかった。

誠叔は、彼の女性が無性に恋しくなってきたので、或る日、ぶらりと又西池園に行ってみたが、尋ねる人は杳として見当らなかった。

雲は刷毛ではいだ様に茜色にたなびき、間もなく日も落ちることであろう。やるせない気持を抱いて帰路につくべく、池園の門を出ようとする、例の女中が又誠叔に手紙をもつて来た。

「妾の住居は桃と杏などの木々の間の低地にありまして、花の時節にはとりどりに美し

いと申せましょうか。月の良い夕べなどには、弟や妹がみんな参りますので、貴方をお慕わしく思わぬ時とてございませんが、貴方とお会いしたくも両親や兄弟隣里のおもわくはづかしく、心にまかせません。いつの日か、貴方が都からお足をお運び下さるならば、その折こそ晴れてお目もじ致します。この手紙持参の者、道筋のことを委しく申しのべます。」

手紙を読み了ると、女中が言った。

「貴方様は、私の申し上げる日に酸棗門から郊外へ出て西北へ道をおとり下さい。景物の一風変わった美しい庭園がお目に入りましたら、そこが私共の住居です。その日になりましたら、妾が柳の下の所でお待ち申しております。」

誠叔は、女中の定めた日が来ると、いそいそと仕度を整えて、酸棗門を出た。教えられた道を二三里ほど行くと、果して例の女中が待ちうけていた。一緒に半里余り行くと、女中の指す先に花の咲き乱れた林が見えた。女中は彼を先導して林の中へ入り、そこにあった一軒の酒店へ入って、誠

叔に酒をすすめた。女中は、自分でも酒をのみながら、

「暫らくここでこうしてお待ち下さい。お嬢さまは、御両親や御兄弟の手前がおりますし、又、朱大臣と隣り合つてのお住いなので、昼中は具合が悪いのです。夜になるまでどうかここでお待ちになって下さい。」

と云つて、急ぐ風でもなく、ゆっくりと盃を重ねるのであった。

やがて陽がうすれて西に入り、人が戸口をとざし始める頃までそこにいと、女中は誠叔を案内して彼の女性の家というのへ連れて行った。

そこは宏壮な門構えの立派な邸宅で、四方に回廊があり、まるで王公の屋敷の様である。

誠叔は離れの一室へ招じ入れられたが、すばらしい部屋で、宝蠟が何本ともまれて、そのゆらめきを受けて調度什器は光りかがやいており、珠を連ねた簾が垂れ、紅い窓掛けがしぼられて、眼もまばゆいばかりであった。誠叔は天外にある様なうっとりした気分になり、やがて現われた例の女性と対座して酒宴に加わった。

「こんな遠くの屋敷にまでお出まし下さるなんて、思つてもみなかったしあわせですわ。妾はまだ部屋住みで、兄弟もたくさん居りますのよ。東西に知り合いも沢山ございますけれど、まだ良縁を得ておりません。今日は、両親も遠くへ出かけて行つたので、一月経たぬと帰りません、兄弟達は婚礼の席へ行つていて、皆留守ですわ。今日こうして貴方とお会いできましたのは、本当に天の賜物といつていいくらいですわ。」

その女は嬉しそうに言つと、小童に命じて踊りをさせたりしながら酒をすすめるのであった。

やがて、例の女中が出て来て、

「王夫人がおみえになりました。」

ととりついだ。女は愛想よく立ち上つて、王夫人を出迎えて言つた。

「お近くにおりますのに、随分久しくお目にかかりませんでしたわ。」

「今日、貴女が御婚礼をなさると伺つたものですから、お接待役のお手伝いに来ましたのよ。」

誠叔は、自席から立つて夫人の方へお辞儀

をすると、夫人も又丁重に礼を返した。

三人が定め席に坐ると、又々山海の珍味が運ばれて来て、祝宴が一段と賑やかになっていった。

丁度夜半の候になると、王夫人が急に立ち上って言った。

「日月は得ること易きも、会聚は尤も難しと古語にありますけれど、本当にその通りですわ。今宵はこうしてお会いしてお話を交すことができて、嬉しうございしました。夜も大分更けましたから、直に夜が明けて了います。又、あらためての機会に、ゆっくりとお話し合いを致しましょう。今夜はこれで失礼します。」

王夫人は、にこやかに会釈を送って、二人を祝福しながら出て行つて了った。

さて王夫人が辞去したあと、二人は枕を並べて寝床に就いた。燈火は昼の様に明るく、錦の屏を立てめぐらした部屋の中に帳紗が軽く床上に垂れて、中から透けて見える蠟燭の光りはゆらゆらと動いて人の神魂を蕩然と夢に誘う様であった。女の肌は滑らかでえも言われぬ香氣を放ち、明玉を錦

衾が覆うとは、まことこのことであらう。

誠叔は、はからずも今宵この女性と契ることを得て、巫山の楽しみ、華胥の物語も論ずるに足らぬという感慨であった。

「王夫人というお方は、一体どういう御身分の方ですか？ どうしてああまで美しい人がこんなところにいるんです？」

試叔が訊ねると、女は言った。

「あの方は帝王家の御一族ですよ。ここに居られる訳は、今は申し上げられません。いづれそのうちに御自身でお判りになりますわ。」

この夜は、二人で色々と思いのたけを語り合つたのであるが、間もなく曉の鐘が残月をおびやかし、鶏の聲が寒村の静けさを破って夜が明けかかった。

女は起き上って、身繕いをしながら言った。

「貴方はひとまずお帰りになって下さい。兄弟が帰って来ますし、お隣りが起るとまづいことになって、貴方はお帰りになることができます。貴方を辱かしめるばかりでなく、妾にとつても具合が悪いのです。」

妾のことをお忘れにならないのでしたら、他日きつと又貴方と御一緒できますわ。」

「今度はいつ会えるのですか？」

「その時には必ず女中に連絡させますわ。」女は、誠叔を見送って門の前まで出て来た。

彼がふり返って女の方を見ると、女は門の柱によりそっており、朝風に着物の袂が揺れ吹かれて清々しく、さながら神仙中の人の様に思えてならない。

誠叔はその女の蕩長けた美しさに愈々惑い、ふり返りつつその邸を遠ざかったのであった。

わが家へ帰ってから数日間というものの、誠叔の心は千々に思い乱れていた。

「あれは妖怪であつたらうか？」

疑つてはみたものの、白粉や紅の痕はなお歴然とひじに残っており、残りの香りはまだ懷中に微かに匂うのである。

その後、一月経つたが何の音沙汰もないので、誠叔は女と一夜を過した例の所を訪ねることにした。心覚えの道をあちらこちらとたどつてみたが、それと覚えき所はただ田圃や

庭園が続いていて、緑の木々が生い茂っているばかりである。

「この辺りに独孤氏のお住居がありませんか」

通る人に訊ねても、誰一人知っている者が居ない。ふとみると、一人の老人が柳の木の下で簑笠をかかえて休んでいるので、同じ様に訊ねて、そのうえ、一部始終をうちあけて話してみた。

「それは妖怪ですよ。」

老人が事も無げに言うので、誠叔が驚いていると、老人は言葉をついでいった。

「びっくりなさるのは無理もない事じゃが、さして人に害を与えることもありませんまい。まあ、そこへお坐りなさい。話して進めましょう。ここには隋の時代の独孤將軍の墓があります。果して本当の墓かどうかは判り兼ねますがの。その下の所に狐が沢山巣を作っておりますのじゃ。そこから西の方百歩ほどの所に王夫人の墓というのがあります。この人は梁の高祖の皇子の奥方ですよ。」

「あの女が何で妖怪だったと判りますか

？」

試叔が老人の言葉をさえぎって訊ねると、

老人は一息入れて答えた。

「もう三十年も前にわたしはこの妖怪のことを聞いたことがありますのじゃ。大抵は人間の妻君になって、夫となって三十年も経った人もありました。夫婦仲の良いものでしたわい。然し、ひょっとしてそむく様なことをすれば、てきめんに報復もしますのじゃ。」

「それでは私の女の場合、あれは独孤の鬼ですか？」

「いいや、違います。独孤は死んでからすでに数百年も経っていますもの、どうして鬼となっておりましようぞ。それはきっと狐の仕業ですよ。わたしは今九十になりますが、これまで見たところでは狐が変化した場合が多いですよ。今でもこの狐がよく若い衆をたぶらかすんですよ。もう先にも、この辺の農家の息子で良い男前の若者がいました。」

が、狐と夫婦になって、一年経つとその女房が子を生ましました。男が家へ帰ると、夜はその子に乳をのませにやって来、昼になると隠れては消え失せるのが常でした。のちに、男の家の者がこの女狐を憎んで、すきをねらって刀でその脚を切り付けたので、それから

もう来なくなったということもありました。」

やがてその老人は、誠叔の背中を手で撫でながら教えた。

「よくお聞きなされ。あんたが若しその女の情を忘れることができなければ、その女と長く関係が続けておられても、それで宜しいのじゃ。あんたが若し途中で心変わりでもなされると、どんな災難を蒙るか判りませぬぞ。命まで取られることもありますまいが、のちのちまで崇られることになりましようよ。」

「あの女が狐だとしてもですね。その情で人間を愛したのですから、どうして崇りなどすることがありましようか」

「さあ、それが若い証拠ですよ。この狐は、儼の見たところでは幾百歳の功を経ていか判りませぬぞ。智慧も情意も人間以上ですし、先の方のことを予め知るだけの靈力を具えておりますよ。或る百姓が耕作しているうちに古い塚を壊したことがありました。が、その時、一匹の老狐が腐った棺によりかかって一冊の本を見ていたので、鋤で狐を一撃してその書物を奪い取りました。それに書いてあった字は誰も識らぬ難しいもので、一日たつと又その本が消えてしまったのです。何の書物だったか、いまだに判りませぬのじ

や。この狐は詩をよむのが巧妙で、歌唱伎芸、何一つできぬことはありません。あんなに狐を深く慕いなさなければならぬ。あんなに狐の方でもあんなに大切に思ひましよう。呉々も心変りをなさる様にな。あんな

が心変りをなされば、すぐさま報復手段に出ますから、それが心配じゃ。

儂はこうしてこの様な奇怪をもう七八十年も見ておりますが、儂が生れぬ前にどんな怪事があったものやら、これ又想像もつきま

せんな。」

老人はこういふと、やおら腰を上げて、杖をつなぎながら行ってしまった。誠叔も、この日はそのままわが家に帰るより仕方がなかった。

(つづく)

弘法大師と奇特

桓武帝の御代に東寺には空海、西寺には守敏がおりかした。延暦二十三年の頃空海が仏教の修行のために唐に渡っておられる間、守敏僧都ひとりが天皇とお近づきになり宮中で加持等をつとめておられました。

あるとき、帝が手を洗おとされると、水は凍って余りにも冷たいので、暫くそのままにしておられました、そこで守敏がその器の水に向って火の印を結びますと、凍

水はたちまち解けて、湯の沸いたようになりました。天皇はこれをごらんになって、余りにも不思議に思われ、わざと火鉢に炭をおこして、障子をお閉めになると、火気はそのなかに籠って、あたたかき春のようになり、お顔から汗が流れ出ました。汗を拭きながら、この火を消さなければと仰せになりますと、守敏が火に向って、水の印を

結びました、すると火はたちまち消えて、寒気は膚を犯し、水を注いだようになりました。このことから帝は守敏をあつく信仰なされました。

その後、空海が帰朝して、弘法大師の号を賜わって参内した折、帝は、守敏のさまざまな奇特の話をされました。その時空海は帝に、「空海がおりますれば守敏は、そのような奇特を現わすことは、出来ません」と申し上げました。

天皇は兩人を試めすために、空海を陰におき、守敏をお召しになって、

「私が湯薬を飲もうとしたら、少し冷えている。例のように加持をして温めてくれ」と仰せになりました。そこで守敏は器に入っている御湯薬に向い、火の印を結び

加持しましたが、お湯にすることが出来ませんでした。帝は、「これはどうしたのか」と仰せられました。また内侍の典主が

わざと熱く沸つた湯をもって参りましたのを、帝が召しあがろうとなさっても熱くて手にふれられない程でしたので、「これは、これは……」と仰せになりました。

帝のこのお言葉に、守敏は前の失敗にも懲りずに、水の印を結びましたが、水になることはできなく、ただ啞然としておりました。

その時、横の障子の内側から、

「空海がここに居る。星の光は朝日に消え、螢火は暁の月に陰る。正法には不思議はなし。」と笑い声が聞こえました。

守敏はこれを聞いて烈火の如くおこりました。

守敏の陰にいて、空海が、その奇特を妨げたのであります。

新刊紹介

和田正系 著

「法然上人の人と宗教」

村 瀬 秀 雄



医学博士和田正系先生が、法然上人七百五十年御忌を記念して、「法然上人の人と宗教」を著された。

和田先生は、古い鑽仰会々員にとって、懐しくもあり、また忘れ得ない人である。先生は千葉県富浦町で自ら診療所を経営しながら千葉大学医学部講師として教壇にたたれ、また日本東洋医学会評議員、日本医史学評議員をされ、医師であり学者であり学界での有力者でもある。先生は熱心なる念仏信者として本会発足当時から同人の一人として活躍され、当時は定期的に「浄土」に執筆されていた。

従って「七百五十年御忌という、再びは遭いがたき良き機会に」刊行されたと申されているが、実は二十数年に亘って先生の身体の中に燃え続けてきた信念の一つの現れと申すべきものである。即ち何か記念にと著された

は、実は筆者が、二十年前に先生から直接教えられた言葉であって、筆者にとって懐しいと同時に、先生の当時からの信念がここに文字となったことを知るのである。

ものでなく、この好機に会して先生の感銘がほとばしり出たと申すべきである。文中に「人は念仏しなければ生きて行けません。

生きるということは念仏することなのです」とある言葉は、実は先生の二十数年に亘る信仰であり、永年の実践であったのである。

「この苦悩と煩悶は病人の上に一層、病気の苦しみの上に、またその何倍もの苦しみと化して重ってきます。(中略)病気は一層悪化してゆくであります。」「感謝は喜びの心です。ここに不幸は一転して幸福に変わります。これが病気にどんな影響を及ぼすでしょう。病気の半分はこれで治ります」の言葉

本書は新書版七十頁という小冊子であるが、文章は人格の現れといわれる通り、全文これ先生の信念の発露である。法然上人の伝記と宗教を著すには何百頁を費しても足らぬことであるのに、本書が小冊子でよく面目を失うことなく、しかも誰にも判るように説かれているのは、思いきった省略、真随を現さんがための省略がなされているためである。これをいいかえれば、豊富な知才を信念という先生の頭脳で消化し、栄養そのものだけを文字にしたからである。これはまた「医学の問題も目標も要するに仏教のそれと同一である」といってよろしいのです」という独特の立場にたち、「上人は釈尊から出発しながら、釈尊を乗りこえた、人間生活の宗教であります」と断じていることで一言をとってみても、それがよく判るであろう。

本書では、上人の根本を「自分は如何ともしがたい凡夫であるという自覚と懺悔」とい

う点に見出し、上人が三十年間に亘る仏道修行の結果、念仏という「簡単な一事」に結論されたのは、「恐るべき革命であつたわけがあります」と賛嘆している。こうした言葉は先生なればこそいえるのである。たとえば上人のお詞の引用についても、坦にと書いた字句の中に現れていて、「あなごととしとぞ仰られける」の御法語の一句を「私には却っておかしく思われるのですが……」という如く、また数多い御法語から選択等にも、先生の苦心の跡がうかがわれる。

上人の「とてもかくても此の身には、思ひわづらう事ぞなき」のお詞に対し、「死生の煩いなければ、この世がこのままに極楽浄土となります。あの世に求めていた極楽はこの世にもあつたわけです。この世あの世、みなつづいた極楽浄土でありました」と理解しているのも、先生の面目というべきである。こうしたところを挙げてゆくと、仏教学者ではない難しい点、医学者でなければいえない点がいくつも目につく。

「口で一心となえる念仏というものが肉体的にも実に重要な効果を持つもので、そ

れが精神方面と一つになって、現実にも大きな効果をもたらすということを、医学的に主張したのであります」といい、「念仏はまた医学的に見ても、肉体そのものの懺悔更生とも、考えられる、非常に良い健康法でもあります。」と説くあたりにも、それが知られる。更にお念仏に対しては苦しいときに、悲しいときに、迷えるときに、嬉しいときにお念仏を申し、「口となえるというのが大切なところで、ただ心の中で思っているだけでは駄目なのです」とはつきり申されるのは、先生の信仰をそのまま言葉にしたというべきである。

本書の最後に、御遺言として「自分が死んだ後は、一同の者一つ所に住んでくれるな、一つに所に集ると和合しているように見えても争いのもとが起るものである。また決して寺を建てたり、仏像を作ったりしてはならぬ。念仏の声する所、ことごとく私のかたみの寺であるから、墓も供養も心配してはならぬ。

ただ静かに念仏してくれ」と記している。これは上人臨終のときの御遺言に、御遺跡のお詞を加味して記されたものである。こうした

点に先生の細心な御苦心がうかがえるが、更にこの結語そのままが、あたかも房総の念仏行者たる先生のおもかげを彷彿させるものである。

会員各位の座右にあえておすすめしたい好著である。

鹿野苑発行（都内豊島区長崎六ノ四）

（新書版・七〇頁・価六十円）



新編 百 喻 經

四一 馬鹿奴

こんな童話がある。

二匹の狼が、兎の凍死体を見つけた。二匹は互に自分の獲物にしようと、真中へ兎をおいて、にらみ合っていた。

そこへ来たのが一匹の狐だ、狡猾にして且悪智恵に富んだ彼は、これを見るとこの獲物を、我が物にしようと考えた。

狐は、狼から事情を聞くと、「では私がうまく裁いてやるから、一寸目をつぶっているがよい」といって、二匹が目を閉じている間に、兎をさらって逃げてしまった。

馬鹿を見た二匹の狼の顔!!

四二 何が大切

S君の妻君が、××教にこり出した。はじめは月一回、教会へ礼拝に行く程度だったが、だんだん熱心になり、遂には家を明け、毎晩毎晩でかけ、やがては昼間から、本部なる処へ入りびたり。主人もたまりか

ね、結局これが原因で、夫婦別れをするこ
ととなってしまうたが、この妻君、××教
の教祖には、気に入ったかも知れないが、
もっと大切なものを失ったのであった。

四三 山師の玄関

最近K君が、すごい写真機を買い、家の
一部を改造して、暗室まで設け、あっぱれ
写真屋は、だしの意気込みだ。

これを見た我々は、さぞかし自信のある
作品を見せてもらえると、楽しんでいた
が、その後の作品は、いやはや、設備と機
械が、泣き出しそうなものばかり、百喻經
の、大石を磨く男を思い出した。

四四 準備運動

六さんという、鐘搗きの爺さんがいた。
この人がこんなことをいったことがあつ
た。

「鐘を打つ時、何回かしゅ木をゆり、そ
の最後の一打ちを打つ時。息を止めて、
さっとくり出すのだ。若い時は、力があ
るので、四五回の振りでやったが、此の

ころは、七八回から、十回程、予振りを
してから打つが、鐘の音は、その方が良
い音がする」

といったが、此の何回かの、無駄の振り
が、良い音の元となるのだ。

四五 利口馬鹿

Sという男がいる、元学校の教師で軍人
上り、それだけに役人根精の、代表的人
物、規則通りの事以外には、何もできない
という愚者で、当然融通のできることも、
規則でできないという、規則の番人的存在
だった。それでいて、悪賢こく、役所の器
具の貸与料の、当然会計へ納めるべき金を、
他へ使ってしまったたり、空出張や、空人夫
で、予算をごまかしたり、私情では、規則
の裏を、平気でやるという始末の悪い、賢
こい馬鹿だ。

(伊 東 拳 位)

×

×

×

×

浄土の会員を一人でも多く

◆どなたでも会員になれます。

◆会費は年額六〇〇円です。

◆会員には毎月浄土を配布します。

◆この会は皆様の会ですからその発展の為に

お一人でも多くの会員をつくって、正しい

信仰運動をひろめましょう。

お知合の方にぜひおすすめて下さい。

◆お申込は振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

今年も「浄土」で明るい生活を

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

（送料 四円）

会費一力年

金六〇〇円
（送料不要）

浄土 四月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十六年三月廿五日 印刷

昭和三十六年四月一日 発行

定価 五十円

編集人 村瀬秀雄

発行人 佐藤密雄

印刷人 神谷秀雄

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

最所刊 浄土トラクト

村瀬秀雄著

月影抄

御法語の栞り

本誌「扉の御法語」として毎月筆執中のなかから著者が七編を選んで解説を付して新らたに浄土トラクトの一編として刊行

目次

- 一、上人のご日常（われ聖教を見ざる日なし）
- 二、浄土宗の意義（われ浄土宗をたつる心は）
- 三、道を求む（かくの如くして昨日もいたづらに暮れぬ）
- 四、決定の信（我は烏帽子もきぬ法然房也）
- 五、弥陀名号の功德（無礙光とは）
- 六、信仰のすがた（つみは十惡五逆のものも）
- 七、念仏と勧める（不輕大士の枝木瓦石を）
- 八、あとがき

東京都品川区上大崎一ノ七八二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

B 6 版	十六頁
定価	十五円
送料	八円
二十部以上五分引	
五十部以上一割引	
百部以上一・五割引	

中村元（東大）・増谷文雄（東京外大）編集
ジョセフ・M 北川（シカゴ大）

現代 仏教名著全集 全十巻 予約募集

A 5 版	四三〇頁
八ポ	二段組
価各	八〇〇円
〒最底小包料金	
全払	七、〇〇〇円

- 一、東洋文化の粹、仏教研究の精華を集成した現代の大蔵経
- 二、現代仏教の研究成果はこれだけ読めばその全貌が解る（四十篇余収録）
- 三、貴重な絶版ものや得難い書籍がまとめて安価に得られる

第一回 第八巻 好評発売中

日本の仏教 (3)

圭室諦成 『日本仏教史概説』
中村元 『近世日本における批判的精神の一考察』

第二回 第三巻 五月中旬配本

印度の仏教 (2)

宇井伯寿 『印度哲学研究』の諸篇
木村泰賢 『小乗仏教思想論』

第三回 第九巻 六月下旬配本

仏教一般 (1)

島地大等 『天台教学史』
梅尾祥雲 『秘密仏教史』

隆文館

東京都千代田区神田佐久間町二の一
振替東京一五三一〇二番
電話（八六六）一一〇一一五番